

# 青森県立郷土館だより

News from the Aomori Prefectural Museum

通巻139号 平成18年(2006)12月5日 Vol.37 No.4

## 郷土玩具展

きたしょうすけ

～北彰介コレクションを中心に～

2006年12月19日(火)～2007年1月14日(日)



作家・童話研究家として著名な故北彰介氏より寄贈された郷土玩具コレクションを展示紹介します。

展示資料は、北氏が日本各地から自分で収集した郷土玩具です。各地に伝わる<sup>たこ</sup>凧、土人形、こけしなどの木地玩具、会津の赤ベコやダルマなど紙の張り子の人形などバラエティーに富んでおり、およそ1000点となります。

また、北氏は「オモチャッコ」という本を出版しています。この本は、かつて県内で子供たちが遊んださまざまな玩具に関して記したものです。今回は、この本に掲載された資料についても展示します。これには、紙鉄砲、竹とんぼ、竹馬、竹スキー、おはじき、お手玉などなつかしいおもちゃがあります。

北氏は長年、県内の昔話や伝説などについて研究しており、また、子供たち向けの民話の創作活動も行っていました。これらの業績についても併せて紹介します。

県内初産出！

## パレオパラドキシアの化石



パレオパラドキシアの左寛骨

今年の4月、深浦町塩見崎近くで、青森市在住の工藤兼三氏が動物の化石を発見し、当館に持ってきました。化石に付着していた砂を取り除く作業を行い、何という動物のどこの部分かを調査した結果、パレオパラドキシアの左寛骨であることが分かりました。

パレオパラドキシアは、2300万年～1400万年前に日本列島中北部から北アメリカにかけての北太平洋沿岸域に生息していた束柱目（そくちゅうもく）に属する哺乳類です。束柱目はややふくらんだ円柱を束ねたような臼歯をもっているのが特徴で、現生の哺乳類にこのような臼歯をもったものはいません。その姿は、現生哺乳類ではカバに似ていると考えられていますが、四肢が体の側方に強く張り出しているため、両生類や爬虫類のようでもあります。暖かい浅い海にすんで軟らかい海草などを食べていたよ

うですが、気候の寒冷化によって絶滅したと考えられています。パレオパラドキシアという名は学名で、「古くて矛盾だらけのもの」という意味ですが、まさに謎に満ちた古生物のひとつといえます。

日本におけるパレオパラドキシアの化石産地は34カ所ありますが、青森県での発見は初めてです。今回の発見は左寛骨のみでしたが、寛骨は背骨と大腿骨をつなぐ骨盤にあたる部分ですので、産出地にはまだ別の部分埋まっている可能性があります。また、産出した地層からおよそ1600万年前の化石と考えられますが、今後の研究によってさらに詳細な年代を明らかにできる可能性があります。

今回発見された化石は、パレオパラドキシアの時空分布に新たなデータを加える重要な標本であり、さらにパレオパラドキシアの種差や性差を検討するのに役立つ可能性も秘めています。



## 土曜セミナーより

### (9月30日実施) 戦国期の津軽の村と村人 工藤 弘樹

津軽戦国時代の歴史的事実を確認するうえで、同時代の資料が少ないことは、周知の通りです。それらを補うために、江戸時代に成立した編纂物などを、資料批判を十分にしたらうえて使用することになりますが、その中には、いきいきとした村や村人の歴史が刻まれています。

大浦（後の津軽）為信が石川城（弘前市）を襲い、南部高信を攻め滅ぼすという事件が発生しました。この時、新屋と尾崎（両方とも平川市）の村の領主は、南部氏麾下の大光寺城滝本氏の支配下に置かれていました。しかし、南部高信が滅ぼされたという情報を得ると、彼らは、“南部の世もこれまで”と、主家筋の大光寺を見限り、また、時の人となった為信に味方するわけでもなく、浪岡に城を構えていた浪岡御所北畠氏

のもとに走る道を選びました。様々な情報を得て、総合的に判断した結果であると考えられます。

続いて、大浦為信が、浪岡御所北畠頭村を滅ぼすという事態が発生しました。これに激怒したのが、出羽国北部（秋田県北）を領有し、蝦夷交易も把握していた安東愛季あきむらです。愛季にとって頭村は、自分の娘婿であり、それをきずなに同盟を結んでいました。愛季は、数年にわたって津軽に侵入します。この時、愛季の通り道となった南津軽の村々は、「一味いちみ」して（たがいに手を結んで）、愛季の味方になっています。無論、積極的に戦闘に参加したとは考えられません。愛季の村の通過を認めただけかもしれませんが、ここに、日和見を決めたむ村の姿がありました。また、愛季軍に攻められた村は、必死で村を守りました。沖館村（平川市）での戦いでは、女性が石や臼を投げて抵抗した様子を見ることができます。

このように、戦国時代の村々は、大名同士の合戦に巻き込まれ、逃げまどうだけの弱い存在ではなく、大名と渡り合えるほどの力を持っていたということが出来ます。

## ものは語る

## 阿部合成と常田健の合作「海の群像」について

現在、民俗の常設展示室の入り口付近に大型の絵画作品が展示されていますが、鑑賞する前に、まずその展示方法を不思議に思われる方が多いのではないのでしょうか。なぜなら、普通壁面に展示されるはずの絵が、なぜか斜めの状態でガッシリした骨組みの台の上にのせられているからです。実はこれには訳があります。

この絵はもともと、昭和初期に青森市造道に建てられた家屋内のしっくい壁に描かれていたもので県病公舎として長年使用していましたが、同公舎の老朽化にともない昭和55年に解体されることになり、その時に、絵の部分まるごと切って額装し郷土館へ収蔵したものです。ですから、壁画5点で数百キロにも及ぶ重量があり、壁につるす普通の展示方法が困難な為に現在の状態でお見せしています。

この絵を描いたのは阿部合成（没年昭和48年）と常田健（没年平成12年）の二人の画家です。ふたりは従兄弟どうして、ともに青森市（旧浪岡町）に生まれ、誕生した年も同じ明治43年でした。阿部は昭和9年に京都市立絵画専門学校を卒業後、帰郷し野辺地中学校の嘱託教員となり、常田は、東京のプロレタリア美術

家同盟研究所で学んだ後郷里に帰っていました。阿部、常田はこの頃にふたりだけのグループ「グレル家」を結成し、美術の研鑽に励みました。その彼らの試みのひとつが、当時阿部が住んでいた前記の家の壁に描いたこれらの作品なのです。合作「海の群像」は「延縄を引く漁師」「船揚げ機をまく人々」「水揚げ」「鱈をかつぐ人々」「魚市場の風景」の5場面よりなり、場面ごとに二人が分担して描きました。この連作は二人の絵画への情熱と友情を示す、青春の記念碑といえます。

（對馬恵美子）



## 郷土の先人⑱

### 五戸を深く掘り下げた民俗学研究者 能田 多代子（のうだ たよこ）

1890(明治23)～1970(昭和45) 三戸郡五戸町出身

現在の五戸町に生まれ、家は酒造業を営んでいましたが、父三浦道太郎は県議会議員などをつとめた政治家でもあり、多代子は学問を好む家族の中で育ちます。多くの弟、妹がいたため多代子は小学校高等科を卒業後、母校である五戸小学校で代用教員をして家計を助けました。しばらくして上京、すぐ下の第三浦一雄（みうらくに お：のちに農林大臣となった）の学費を助けるため、仕事につき、同郷の鳥谷部陽太郎（とやべようたろう：1894～1956年）の「兄弟通信」の編集、執筆を行ったりしていました。そうした中で、作家志望の能田太郎（1903～1936年）に出会います。

太郎は、熊本県の出身、文学を志して上京、独学で語学を修めるなど、大変な勉強家でした。やがて昔話や方言に興味を持ち、民俗学へ傾倒していきます。二人は1923(大正12)年に結婚しますが、まもなく太郎の目は病に冒されます。多代子は夫の「眼」となり、家事の合間に本を読み、口述を書き取るなどして研究活動を助けます。

1936(昭和11)年、夫太郎と死別、その後多代子は東京で下宿屋を始め、本格的に民俗学研究に取り組みます。日本民俗学を代表する柳田国男(1875～1962年)に師事、自身のふるさと五戸地方を対象を絞り、方言や昔話をたんねんに拾いあげ記録しました。1938(昭和13)年の『五戸の方言』を皮切りに昔話集『手つきり姉さま』、南部地方の衣食住を中心にした『村の女性』(写真)などを発表し、

女性民俗学研究者の第一人者として活躍しました。

その蔵書は青森県立図書館に寄贈され、能田文庫として整理されています。

（太田原慶子）



『村の女性』 昭和18(1943)年 三國書房発行  
女性の一生を軸に五戸地方の習俗を他の地方と比較しながら紹介。挿絵は今純三(弘前市出身 銅版画家)



## 12月～3月の行事

### 特別展・企画展等

12月19日(火)～1月14日(日)

**郷土玩具展**—北彰介コレクションを中心に—

1月26日(金)～28日(日)

**第16回日専連全国児童版画コンクール  
青森地区選**

2月9日(金)～3月18日(日)

**あおもり新発見2006展**

### 冬休み企画

**冬休みクイズラリー** (詳細は下記)

12月16日(土)～1月21日(日)

**冬休みめぐりまわし大会** (詳細は下記)

1月7日(日) 13:00～15:00

### 土曜セミナー

12月9日	南部の大河 馬淵川	齋藤 潔 氏
12月16日	マッパルで見ると昭和30年代の青森	相馬 信吉 氏
12月23日	おもちゃとあそび	三上 強二 氏
1月6日	イギリスの博物館展示で見た日本 ～新幹線・阪神大震災、そして考古資料～	齋藤 岳 氏
1月13日	岩木山の生物多様性と保全	阿部 東 氏
1月20日	江戸時代の本県の交通	佐藤 良宣 氏
1月27日	弘前藩の法令にみる武家の生活	黒滝十二郎 氏
2月3日	青函連絡船と青森県	竹村 俊哉 氏
2月10日	木炭とくらし	昆 政明 氏
2月17日	青森県の明治期の美術	對馬恵美子 氏
2月24日	出土遺物を楽しむ	一町田 工 氏
3月3日	石器時代の青森	福田 友之 氏
3月10日	平安時代前期の人々の生活	成田 誠治 氏
3月17日	「あおもり新発見2006」展示資料について	神 真波 氏
3月24日	大浦為信と南部信直 ～乱世を生き抜いた二人の武将～	工藤 弘樹 氏

## 冬でも郷土館はあついで！～冬休み行事のお知らせ～

郷土館では、この冬、小学生と中学生を対象に「冬休みめぐりまわし大会」と「冬休み郷土館クイズラリー」をおこないます！

### 冬休みめぐりまわし大会

日 時 平成19年1月7日(日) 13:00～15:00

場 所 青森県立郷土館 小ホール

参 加 料 無料 (参加賞の他、入賞者にはすてきな景品がおくられます！)

対 象 (定員) 小・中学生 (申し込み順先着30名)

親子での参加も大歓迎ですので、多数のご参加をお待ちしています。  
申し込みは、電話かFAXで受け付けます。

TEL 017-777-1585 FAX 017-777-1588

お名前・学年・ご住所・電話番号をお知らせください。



### 冬休み郷土館クイズラリー！

期 間 平成18年12月16日(土)～平成19年1月21日(日)

※ 年末年始(12/29～1/3)はお休みです。

場 所 青森県立郷土館

入館料 小・中学生は無料

「みる・さわる・かんがえる」をキーワードに、館内の展示やわくわくたいけんルームのアイテムをヒントにして、青森県についてのクイズを解いていきます。

がんばった人には、終了証とすてきなプレゼントがおくられます。年末年始を除いて、冬休み中はいつでも参加できますので、どうぞお気軽にご参加ください。

詳しくは青森県立郷土館までお問い合わせください。

総合博物館 青森県立郷土館だより Vol. 37 No. 4 通巻139号 2006.12.5

編集・発行 総合博物館 青森県立郷土館

〒030-0802 青森市本町二丁目8-14 TEL (017) 777-1585(代)

ホームページ <http://www.pref.aomori.lg.jp/kyodokan/>

